

新しいふれあい社会

認定NPO法人東葛市民後見人の会

情報誌（毎月 2500 部発行）

事務局 我孫子市湖北台 6-5-20

平成 30 年 2 月発行（第 47 号）

Tel/Fax 04-7187-5657

座間事件の深層（その 2）殺人鬼と化した加害者の謎

樋場 雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

人びとに戦慄をもたらした、9 死体遺棄事件の発覚から 3 ヶ月を経ました。人の噂もなんとやら、街角でも人の話題になることも少なくなりました。けれど、捜査関係者の地道な努力は続いている、9 人の被害者それぞれの DNA の鑑定などで、本人と確認された時点で、容疑を「死体遺棄」から「殺人」に切り替え、再逮捕します。その度にマスコミの報道もありますが、意外なことに人びとの反応は、「今さら言わなくても、本人がすべて自白しているものね。死刑に決まっているよね」と冷ややかに、「結果（判決）ありき」の反応が大半を占めています。それでよいのでしょうか？

当相談室では 1 月号で、このような事件が二度と起こらないことを願って、被害者個々の情報にもふれて考えました。それは、「事実を実感として受けとめ、共有する」ためにも、必要なことと考えてのことでした。被害者の実名報道についての、マスコミによる街角でのインタビューでは、「被害者のプライバシーを守るべきで、誰が被害者であっても、犯人に対しての怒りは変わらない」「被害者の実名や顔写真まで出さなくても、加害者が犯した罪の重さに変わりがないのではないか」と、犯人（容疑者）への憎しみ、被害者に同情した意見が大半を占めています。

当相談室に寄せられた意見にも、元刑務官という女性から 9 死体の遺棄、いわゆる座間事件は、報道が進んで全容が明らかにされるほど、その残酷さに腹が立つ。残酷さという点だけで言えば、昨年、相模原で起きた、障害者入所施設での、利用者殺傷事件を上回ると言ってもよいと思う。無差別大量殺人事件の点から見れば、平成 13 年の池田小事件、平成 20 年の秋葉原事件を思い出す。どちらも歪んでいるとはいえ、彼らなりの社会への反逆心があつて、死刑を覚悟した上で、犯行に及んでいる。犯行に至る前に心の歪みを癒してあげる術はなかったのか、聞いてあげる人は一人もいなかつたのか、と思うところがあった。しかし、白石容疑者の場合には、それらが全くない。強いて言えば、昭和 43 年に起きた大久保清事件が思い出される。当時は珍しかった高級乗用車を乗り回し、街中で目をつけた若い女性に窓越しに声をかけ誘い込み、2 カ月に 8 人を殺害した稀代の猟奇事件と騒がれたが、最終的に「快楽殺人」「屍姦」と判断されて、死刑が執行されている。白石は、これと類似した、或は同型の犯罪ではないか。それとも、全く新しいタイプの犯罪か、と自身の犯罪についての知識と事件についての見解を述べて、意見を求められました。

私としては、いいえ、「市民が市民を支える社会」をめざす後見人の会の相談員としては、今は容疑者の罪名を考えることより、このような事件が二度と起きないためにも、起こさないためにも、「何が彼をこのような殺人鬼にさせたのか」「事実を実感として受け止めて共感する」ためにも、「被害者に行ったように、彼の成育歴、家族歴、学校関係、友人関係、社会歴を能うかぎりに探つて、考えたい」と伝えるのが精一杯でした。「そうですよね。犯人を憎んだり、怒っているばかりでは始まりませんね」と応じてくれました。

（独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業）

白石隆浩は座間市で出生、家族は両親と妹の4人の平均的な核家族。父親は日産リーラなどの、電気自動車の充電に使われるコネクタの設計士で、経済的に問題はなかったと考えられています。住居は、今回の事件の現場となったアパートからおよそ2キロほど離れた、住宅街の一角にある一戸建ですが、近隣との交流には乏しく、「夫婦は別居中らしい」程度の情報しかありません。

小学校の友人によると、日頃はおとなしくて、どちらかと言うと、“いじられギャラ”でした。その一方で、彼の家でマリオカードやツイッターで遊んだときに、いつもは感情的になることなどないのに、ゲームで自分が負けると半狂乱になって驚いたことを今でも覚えています、と証言しています（週刊文春 社会部記者）。

中学時代は、特にいじめということではないが、体育部の同級生からヘッドロックを掛けられているのを、しばしば見かけたことがあります。いわば、“いびられタイプ”とでもいうのでしょうか。高校進学に際しても、誰とも話したことがなく、県立高校で国際経済科という女生徒の多い学校に進み、座間からは彼ひとりだけだったので、「座間石」と、渾名をつけられていたという噂だけは聞いたことがあります。その後の交流は全くありません（中学時代の友人の話 同上）。

高校時代は、彼はクラブにも入らずに、市内のホームセンターでアルバイトをしていました。周囲に溶け込めず、“おたっくぼい”印象しかありません。正直にいって、野球部やサッカーチームの屈強な連中から、肩を殴られたり、プロレス技をかけられたりしているのを見たことがあります。忘れられないのは、高2の二学期に、連絡もなく、1~2週間登校しなかったことがあります。久々に登校したとき、担任から理由を聞かれ、「自殺しようと思ったができませんでした」と答え、教室中がざわついたことがあります。そのとき、先生は何も言わずに過ぎてしまいました。その後、彼はますます孤立していったように思います（高校時代の同級生の証言 同）。

更に気に懸かるのは、同じ時期に両親が別居するようになり、妹は名門女子大付属高校を目指し母方に移りました。彼は父方に残って通学を続けていましたが、父と子は別々に近くのコンビニへ弁当を買いにきていた、との情報もあります。

高校卒業後、大手スーパーに入社しました。配属先の希望を聞かれ、即座に「パン屋がいい」と答えたと言います。当時のパン屋は女性ばかりだったので、女性に囲まれた職場に憧れていたのでしょう、と当時の職場関係者は推測しています。2年でそこを退社。パチンコ屋や携帯ショップなどを転々とした後、平成27年に始めて夜の世界に足を踏み入れました。

スカウトマンに転じた彼については、その当時付き合いがあった、同僚のスカウトマンY氏が、事件発覚直後に、テレビの取材に応じています。彼は日頃から金を稼ぎたい。月に100万円位は稼ぎたいと言っていました。そのために、池袋のスカウト会社で働くようになりました。しかし、実力が伴わないと、精神的に病んだ女性ばかりをスカウトするので、「使いものにならない」と言われていました。話術の修行のためにマルチ商法の知人を紹介したら、自分が金を払って入会してしまったのには呆れてしまいました。

更に彼は酒に弱いのに、酒に溺れて酔っぱらい警察の厄介（留置）になったこともあります。同じ頃、仲間たちと心理テストをしたことがあります。そのとき彼に、“サイコパス”との結果がでました。何か前兆のように思えてなりません、と情感を込めて語っていました（匿名、顔全体を網掛けにする約束で収録された）。

このような、自堕落な生活をしていたというものの、犯罪史上でも類のないような、おぞましい殺人鬼に変身してしまったのか、スカウトマンとはいえ、触法行為となるような女性への接し方を垣間みせる、彼の人格の二面性にも触れて、探ってみました。

前述のY氏の話からも察せられるように、彼は金銭に対する執着が強く、スカウトマンの反面で、AVにも出演しており、「人気女優の〇〇と、屋上にプールのあるスタジオで撮った」と自慢気に話をしていたなどと、彼を知るという遊び仲間（匿名）の情報もあります。スカウトマン、DV男優と、裏稼業にかかわるうちに、私生活は荒んでいく一方だったと思われます。

平成28年の春、スカウトで出会った女性から「レイプされた」と言われ、本人は「合意だ」と主張していたが、相手から「警察に行く」とまで言われていました。同年6月以降、ツイッターで「フェアリー」や「♪全国在籍出稼ぎ♪」などの複数のアカウントを開設して、出会い系アプリを利用、そこで女性を風俗に勧誘していたが、トラブルが相次いでいました。特に贋躰を買ったのは、ツイッターで知り合った女性J子さんに対する悪質な仕打ちでした。J子さんは必要に迫られて、3万円を借りたところ、「身分証の原本などを全部預かる」と、住基カード、キャッシュカード、保険証まで持てこさせ、茨城県の違法風俗店に紹介した上、風俗店用のヌードを撮影されました。身分証が返ってきたのは返金後4カ月経てからのことでした。同じ年の夏の深夜、新宿歌舞伎町でスカウトされた女性は「ガールズバーで働きたい」と言うと、「俺、DC（違法風俗店）に強い」と言って、水戸、土浦、群馬などの出稼ぎができる風俗店をごり押ししてきました、と明かしてくれました。

この頃になると、彼は「悪徳スカウト」と呼ばれるようになり、肩書は「スカウト会社副代表」でしたが、代表が常に海外に出かけ、仕事を押し付けられている、と焦燥感を露わにしていました。特に仕事を紹介した女性が飛ぶ（音信不通になる）と抑うつ状態になり、平成29年1月になると、「人生ログアウトしたい」と漏らすようになりました。

疲弊する彼に追い打ちをかけるように、2月になり茨城県神栖市の違法風俗店に女性を紹介したとして、茨城県警に、職業安定法違反容疑で逮捕されてしまいました。ここまでくると、さすがにショックを受け、スカウト業から足を洗い自宅近くの食品店で週4日のアルバイトを始めました。しかし、規則正しい生活は2カ月もたず、一度溺れた無軌道な世界に舞い戻ってしまいました。7月下旬には川崎駅近くの商業施設で、女性をナンパする姿が目撃されています。

事件現場となったアパートを契約したのは8月22日のことで、その日の夜「死にたい」というツイッターアカウントを開設。9月15日には、「首吊り士」というアカウントを開設して積極的に、“自殺の案内人”として“悩める自殺志願者”を指南するようになりました。

ところが、それより前の8月中旬からノコギリ、鉈、キリ、ロープなどの殺害のための道具を次々と購入していることが捜査で明らかになっています。同時にスマホで「練炭」「溺死」「首吊り」などのキーワードを頻回にネットで検索したことも捜査結果として報道されています。

最後の被害者・田村愛子さんの捜査に向かった警察官が、「田村愛子さんを知っているか」と、尋ねると、玄関にあるクーラーボックスを指差して、平然と「彼女ならここにいます」と答えたと言います。そこで捜査員が目にしたのはクーラーボックスに収納された9つの頭部でした。一捜査員は、警察官の身でありながら、怒りと怖ろしさで身の震えが止まらなかつたと言います。

この一連の記述に当たって、事件報道直後から、「事故を現実のものとして、実感する」ために、「何が彼をそうさせたかを探る」ために、折あるごとに図書館や地域の近隣センターに足を運び、数種の新聞、週刊誌にも目を通して、必要な個所を抜き書きしました。また或る時はインタビューよろしく、市中の人々に、こちらから声をかけ、意見を聞くこともありました。この間にもテレビの報道は逃さず視聴していました。相談室にも、真剣な意見が寄せられていました。

これらのこと踏まえ、新聞や雑誌の抜き書き、テレビのニュースなどで得た情報を縦軸として、街中で直接聞いた意見、相談室に寄せて頂いた意見を横軸にして織りなしたレポートです。

こんな事件さえなかつたら、おそらく誰からも忘れられていたとさえ思われる、小学校時代から高校時代までの12年間、彼の心の奥深くに抑え込まれていたであろうストレスを示すものとして、当時の級友が、それぞれに当時の状態を如実に物語る短い言葉を思い出してくれました。

小学校時代“いじられキャラ”、中学校時代“いびられタイプ”、高校時代“おたくっぽい印象”といわれていたという事実をどう考えますか？

忘れてならないのは、この時期に本人の口で語られている、「自殺念慮、未遂」の一件です。教室中がざわついたというのに、先生は何も言わずに、その後のフォローも定かではありません。加えて、この件についての家族からの連絡や相談があったのか否かすら、明らかにされていません。更に、同じ時期に両親は別居し、優秀と見做されていた妹は母親と共に家を出て、本人は父親のもとに残り、父子家庭となっています。このことについても、その当時は多くは語られていません。これが小学校入学以来、高校卒業までの、対人関係、家族状況の「事実と実感」です。

高校卒業後、就労したものの青年後期の「自分の生き方を見い出す」課題が達成できないままに、無責任、不安、孤独、性役割の葛藤の4つを兼ね揃えた、ピーター・マンの心模様がうかがえます。その後はスカウトマンに転じていますが、心の中は冷たい風が吹き荒れていたのだと思われます。逮捕される直前まで、彼の手に握られていたスマートフォンには、ぐったりとした遺体に手をかけ、解体していく一部始終を収めた画像が保存されていたと、報道されています。週刊誌などは、9人を次々に殺害した犯行動機は、殺害そのものに異常な興奮を覚える「快楽殺人だった」などと書き立てています。有識者は「この犯人は全く新しいタイプの殺人者ではないか、単に猟奇事件ではなく、社会学や文明学の観点から解明を要するのではないか」と説いています。

とまれ、彼の生育歴を見ると、改めて生育環境の心の問題を思わずにはいられません。それは、家庭、学校に止まることなく、地域社会全般を含めてのことです。いつ、この事件を真似た犯罪が起きないとも限りません。それを防止する一助に私共があります。もう一度言わせてください。
「あなたも私もゲートキーパーです！」と。そして、「We are not alone！」と。

〈世に出る前の準備〉◆漫画本『君たちはどう生きるか』がバカ売れしているそうです。自分の生き方に悩み、不安を覚える若者が多いからでしょうか。座間事件の加害者も小中高校時代に良き師、良き友、良き家庭に恵まれず、自分の生き方を見つけられないまま、サイコパス人間と化したのでしょうか。◆キリスト教におけるような神の抑止力がなければ自律ができず、自立も困難。真の個人主義者たりえず、利己主義者となるのみである。それゆえ、家庭・社会・国家の中で生きる普遍的な規範を教えること=他律が必要である、と力説する識者もいます。

◆教育の三本柱は知育・德育・体育。知育も体育も基本・基礎となる型・公式・原理を学ぶことから始まり、その先に応用や個性が生まれます。◆德育も同じこと。人間らしく生きるための社会の規範・慣行などをしっかりと身につけ、そこから自制や自主や社会性が得られるのでしょうか。それを欠けば、自分さえよければの風潮が蔓延し、権利ばかりを主張し、家族や他人や次世代への思いやりのない、公徳心に欠ける日本人で溢れかえります(h)。